

北陸家族旅行(H19.12.31 ~ H20.1.2)

右城 猛

■ まえがき

わが家では全員が働いているので、揃って旅行に行けるのは正月休みくらいしかない。このようなことから昨年に引き続き、今年も正月に家族旅行をすることにした。

今年はベトナムを希望していたのであるが、旅行会社への申し込みが遅かったせいでどこのツアーも一杯で締め切られていた。国内も九州や北海道、東北など人気の高いコースは既に締め切られていた。残っていた中から選んだのが、読売旅行高知営業所が企画していた「お正月能登半島3日間」というバスツアーである。金沢には12月15日に行ってきたばかりであったのでできれば避けたかったが、選択肢はなかった。

旅行は12月31日(月)の朝8時に高知を出発し、永平寺、尾山神社、兼六園、巖門・能登金剛、輪島、気多大社、東尋坊を巡って1月2日の深夜に高知に帰るというものである。わが家の妻・絹枝、怜佳と私に加え、11月3日に結婚したばかりの堀田朋男・和恵夫婦の5名で参加した。



37名の参加者で記念撮影

■ 日程(予定)

12月31日(月)

棧橋(7:30) - 高知(8:00) - よどや薬局前(8:10) - 南国IC(8:40) - 高知道 - 高松道 - 瀬戸大橋 - 山陽・名神道 - 多賀SA(13:20) 休憩(13:50) - 北陸道 - 福井IC - 永平寺(15:20) 参拝(16:50) - 金沢市内ホテル・ルートイン金沢駅前(17:40)頃

1月1日(火)

ホテル(9:00) - 金箔工芸見学(9:40) - 尾山神社(9:50) 参拝(10:20) - 兼六園(11:35) 昼食と見学(13:20) - 千里浜なぎさドライブウェイ - 能登有料道 - 巖門・能登金剛(15:00) - 輪

島温泉・ルートイン輪島(15:00)

1月2日(水)

ホテル(8:30) - 能登道路 - 気多大社(9:10) 参拝(10:00) - 能登有料道路 - 加賀(10:50) 加賀城お菓子試食, 昼食, 九谷焼窯元見学(12:50) - 北陸道 - 東尋坊(13:30) 自由散策(14:30) - 北陸道 - 明石海峡大橋 - 大鳴門大橋 - 徳島道・高知道 - 高知(21:50) 頃

■ 高知から北陸へ

私たち5名は,高須のよどや薬局前で乗車する。バスは南国 IC から高知道に入り,高松,瀬戸中央,山陽,中国,名神を多賀 SA まで走って,そこでトイレ休憩と昼食を取る。その後米原 JCT から北陸道に入った。

滋賀と福井の県境付近に差し掛かると積雪が見られるようになる。14時30分,敦賀 IC の手前で渋滞に合う。チェーンを装着していない車両を一般道に降ろす目的で,全ての通行車を敦賀 IC で一旦本線から降ろしていた。それが渋滞の原因。



敦賀 IC の手前で渋滞

■ 曹洞宗大本山・永平寺



永平寺の建物

15時10分、福井北ICを降りて最初の見学先である永平寺へ。到着は予定通り15時20分。

永平寺は、今から約760年前の寛元2年(1244)道元禅師によって開かれた座禅修行の道場。境内の広さは約10万坪。樹齢約700年の老杉に囲まれた深山幽谷の地に七堂伽藍(しちどうがらん)を中心に70余りの建物が並び、約200名の僧が修行に励んでいる。

全国に1万5千の末寺があり、800万人の檀信徒がいるといわれている。

永平寺の通用門から入ると、靴を脱ぎスリッパに履き変えられた。そして畳敷きの広い部屋で僧侶から永平寺の概要と見学の留意事項の説明を受ける。

朝の掃除、座禅、炊事、見学者への説明、これら全てが修行とのことである。

傘松閣(さんしょうかく)

最初に見学できるのが傘松閣の二階にある165畳敷きの大広間。昭和5年に建築されたもの。天井には建築当時の著名な画家144名によって描かれた230枚の花や鳥の色彩画で飾られている。別名「絵天井の大広間」。

写真撮影はできるが、フラッシュを炊くことは禁止されている。



永平寺の正面参道



永平寺の通用門の前



三傘松閣の絵天井の大広間

七堂伽藍（しちどうがらん）

寺院の建物のことを一般に伽藍（がらん）と呼ぶ。これは僧侶が修行する場所という意味。その中で、日常の修行に欠かすことができない重要な七つのお堂を「七堂伽藍」と呼ぶ。

七堂伽藍には山門（さんもん）、仏殿（ぶつでん）、法堂（はつどう）、僧堂（そうどう）、庫院（くいん）、浴室（よくしつ）、東司（とうす）がある。

山門は修行僧が仏の世界に入る関門。永平寺では最古の建物で、福井県の文化財に指定されている。

仏殿は七堂伽藍の中心に位置し、永平寺の御本尊である釈迦牟尼仏（しゃかむにぶつ）が祀られている。

法堂は七堂伽藍の一番奥（一番高いところ）にあり、説法や各種法要が行われている。僧堂は修行の根本となる道場で、坐禅、食事、就寝が行われている。大庫院には食事を作る厨房、来客を接待する部屋などがある。浴室は入浴場。東司とは厠（かわや）のこと。

七堂伽藍の廊下があるが、吹雪除けの囲いが設置されており、外に出られる場所は限られていた。外に出て写真を撮ることができたのは庫院だけであった。



仏殿



庫院の外の廊下で撮影



庫院と法堂を結ぶ連絡路の階段



法堂の中から仏殿を背にして



東司



浴室

■ 祠堂殿(しどうでん)

祠堂殿は昭和5年に新築された建物で、一般の人々の納骨や供養などの法要が行われている。堂内には全国の信者から集められた位牌が安置されている。



信者の位牌



祠堂殿に祀られている地蔵菩薩



焼香



大数珠



通用門を出ると大雪になっていた



玄関口(正面参道の入り口)に飾られた門松



正面参道の行燈



参道の橋



橋の地覆には消雪ノズルが取り付けられてお、散水が行われていた

■ ルートイン金沢駅前

集合場所になっていた土産物屋「井の上」で土産物を見てトイレをすませ16時45分、永平寺を後にする。

再び北陸道を通り、金沢駅前にある「ルートイン金沢駅前」に予定通り18時前に到着する。

ホテルルートインは、1977年創業のルートインジャパン(株)が運営しているビジネスホテル。全国に196店舗(2007年10月)ある。9店舗あるアークホテルやホテルアミスタ大井・阿佐ヶ谷、阿蘇・徳島プリンスホテルなども同じ系列。

ルートイン金沢駅前には14階に展望大浴場がある。部屋は狭いが、ベッドはセミダブルでゆったりしている。朝食はバイキング。ビジネスホテルの割に味は良かった。



ルートイン金沢駅前

■ ご馳走 四分之一（ごちそう しぶいち）

夕食はツアーには含まれていなかったため、出発前にネットからホテル近くの料理屋「ご馳走 四分之一」を予約してあった。

6人用の個室が用意されていた。掘り込み式の座敷の部屋。新築されたばかりのようで木の香りがする。一人7千円の懐石料理を食べたが、美味しく、量もたっぷり満足できるものであった。

折角のご馳走を妻はホテルに帰るなり全て戻してしまった。長旅の疲れにアルコールが効きすぎたのだろう。



ご馳走 四分之一(HPより)

■ 箔座本店

金沢市森山にある箔座 (HAKUZA)本店を見物する。ここでは、金箔の工艺品や小物、黄金の茶室、黄金の五重塔、箔打ちの実演を見ることができた。

黄金の茶室は、豊臣秀吉の黄金の茶室をモデルに再現したもので、純金箔が約4万枚使用されているとのこと。見事である。

金沢の地名の由来は、金が出る沢があったことによるということを初めて知った。



箔座本店



箔打ちの実演



黄金の茶室



金運に恵まれることを念じつつ記念撮影

■ 尾山神社で初詣

尾山神社（おやまじんじゃ）は、加賀藩の藩祖前田利家を祀った神社で、金沢市尾山町にある。創建は 1873 年。境内には歴代藩主を祀った金谷神社、小堀遠州作の日本庭園、前田利家の騎馬像、お松の方の碑、力比べに用いる「さし石」（力石）もある。

第一コンサルタンツが四国一になることを祈願する。2013 年と書くべきなのに 2005 年と書いてしまった。元旦早々先が思いやられる。



最上部の窓がステンドグラスになった神門は国の重要文化財



尾山神社本堂



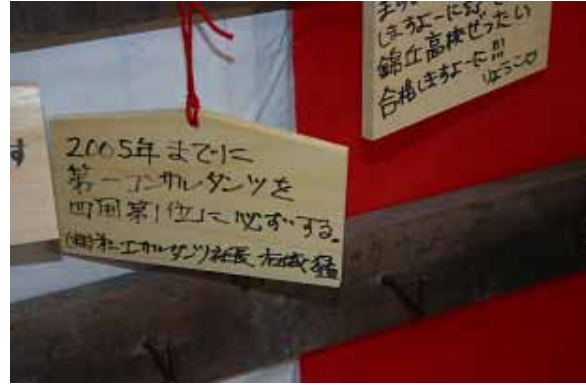
小堀遠州作の庭園。アーチ型石橋の囀月橋（とげつきょう）がある。



前田利家の騎馬像



絵馬に縁結びの願いを書く



H25年あるいは2013年と書くべきなのに2005年と書いてしまった。

■ 兼六園

兼六園（けんろくえん）は、広さ約3万坪、江戸時代を代表する池泉回遊式の日本庭園で国の特別名勝に指定されている。岡山市の後樂園と水戸市の偕楽園と並んで、日本三名園の一つである。

金沢市の中心部に位置し、旧百間堀を道路とした百間堀通り（百万石通り）を橋で渡ったところの石川門から金沢城公園へと続いている。

江戸時代に加賀藩の庭園として造られたことに端を発する。

13代藩主前田斉泰は天保8年（1837年）霞ヶ池を堀り広げて増庭させ、現在のものにほぼ近い形にしたとされる。「兼六園」の名称が定められたのもこの頃である。

霞ヶ池の北岸には水面を照らす雪見灯籠が設置されている。足が二股になっていて、琴の糸を支える琴柱（ことじ）に似ていることから、徽軫灯籠（ことじとうろう）の名が付いている。



兼六園の入り口



霞ヶ池と徽軫灯籠



「雪吊り」は兼六園の冬の風物詩 私は兼六園に4～5回訪れている。最近では2週間ほど前に来ている。しかし、雪景色を一度も見たことがなかったので、今回は絶好の機会と期待していたのであるが、雪が思ったより少なくて残念。



唐崎松(からさきまつ) 琵琶湖畔の唐崎松から種子を取り寄せて育てた黒松。兼六園のなかで最も枝ぶりが見事。



大小40数本の根が地上2mにまでせり上がった
根上松



七福神山(しちふくじんやま)



花が咲いた冬桜



青戸室石の一枚石で作られた黄門橋



霞ヶ池の水面との高低差による自然の水圧で約3.5m 吹き上げる日本最古の噴水



金沢城と石川橋

■ 能登金剛と巖門

石川県羽咋郡富来町海岸の 29 キロに及ぶ景勝地を「能登金剛」と呼ぶ。北朝鮮の海金剛に似ていることから、能登金剛と名付けられたようである。

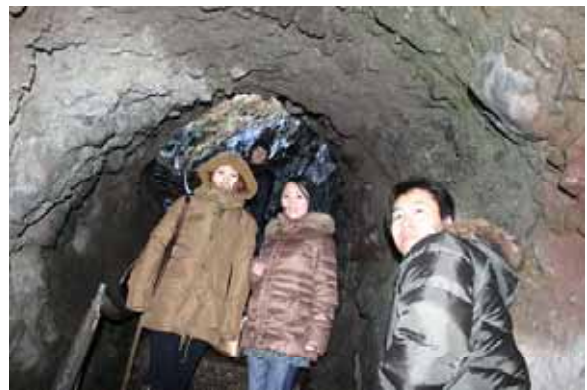
「巖門」は「能登金剛」のほぼ中央に位置した老松が茂る海食崖を貫通した洞門。



巖門の入り口



巖門の入り口



巖門の中



巖門の出口



巖門の貫通洞門



左の岩が鷹の巣岩



巖門の上は展望台になっている

■ 輪島

能登金剛の巖門を見物した後、能登二見とよばれる機具岩、泣き砂の浜として有名な琴ヶ浜を左手に見ながら国道 249 号を走って輪島に向かう。

門前町を過ぎて山岳部に入ると積雪が見られたが、輪島市には全く雪は見られなかった。

ホテルルートイン輪島には 16 時 40 分に到着する。ホテルには 1 回に自然温泉の大浴場と露天風呂があったので、夕食前と朝食前の 2 回入浴する。

夕食は 1 回のレストラン。バイキング料理であったが、正月とあって料理は比較的豪華。刺身、コウバコで出汁をとったみそ汁はとても美味しくて好評であった。

コウバコとはズワイガニのメス。石川県では『香箱ガニ』(コウバコ)と呼ばれるが、福井県では『せいこ蟹』、山陰地方では『セコ蟹』と呼ばれている。



ホテルルートイン輪島



ロビーでは、セルフサービスで無料のコーヒーが自由に飲める

■ 輪島からの道路

2 日、輪島からの帰りは国道 271 号で恵寿まで走り、そこから能越自動車道穴水道に乗り、穴水町から能登有料道路を走る。

輪島の市街を外れ山岳部に入ると、周りは真っ白な雪景色でその美しさに感動する。



輪島の街並み



国道 271 号線周辺の雪景色



能越自動車道穴水道の手前

ツアーの予定では千里浜なぎさドライブウェイを走行することになっていたが、海が荒れていて通行止めになっているので走れないという添乗員の説明であった。

羽咋市(はくいし)域南部から宝達志水町(ほうだつしみずちょう)今浜にかけて8kmの海岸を千里浜海岸(ちりはまかいがん)という。車が通れる砂浜として全国的に有名である。

他の海岸の砂の粒径は1mmから0.5mmであるが、ここの砂は4分の1mmほどの細粒であるため、それに海水がしみこんで固い砂浜を作り上げるため、波打ち際をバスも走ることができる。

しかしながら、海岸侵食で最近20年間に30~50mの汀線後退を生じているようである。このため、海が少し荒れただけでも通行ができなくなるのであろう。



能登有料道路(石川県道路公社のHPより)

■ 気多大社

気多大社(けたたいしゃ)は、石川県羽咋市に鎮座する大国主命を祀る神社。利家とまつが信仰した縁結びで知られる歴史ある神社である。

おみくじを引くと、なんと大吉と出た。「身も進み財宝も出来、立身出世する事。春の暖かなる日美しき花の野を心楽しく遊び行く心地にてよき人の引立にあずかるべし。されど心正からねば災いあり」と書かれていた。



気多大社の参道



神社入り口で神官がお祓いをしていた



神社本殿で祈願をすませる



おみくじを引いて見せ合う

■ 加賀銘菓の試食と九谷焼窯元見学

御菓子城加賀藩

北陸道路の片山津 IC を降りて、国道 8 号線沿いにある「御菓子城加賀藩」を見学する。広大な敷地に建てられた建物には、和菓子の展示販売コーナー、菓子工場などがあつた。

九谷焼窯元「九谷満月」

九谷満月は、「御菓子城加賀藩」から少し西側の国道 8 号線添いにあつた。ここの 2 階レストランで遅い昼食を取る。

1 階は九谷焼の工芸品、日用品の展示・販売コーナーになっていて、入り口付近には醍醐(だいが)花見の図を描いた作田利男・作の巨大壺が展示されていた。定価は 3 百万円である。

奥の部屋には、人間国宝「三代目・徳田八十吉」をはじめ、著名作家の作品を多数展示したギャラリーコーナーがあつた。

店長らしき年配の男性が、徳田八十吉作の壺を購入するように言葉巧みに勧めてきた。グラデーションが美しい定価 294,000 円という壺を 160,000 円まで値下げすると言ったので思わず買う気になったが、妻が制止したので諦めた。



御菓子城加賀藩



「九谷満月」の正面



作田利男作の定価3百万の壺



徳田八十吉作の 燿彩壺・恒河

■ 東尋坊

最後の見学先は東尋坊（とうじんぼう）。海岸の岩肌が波によって削られてできた高さ 25m の絶壁が続いている。東尋坊という名前の乱暴な僧に酒を飲ませ、酔わせて崖より突き落としたということが、地名の由来になっている。

東尋坊の地層は、1,200～1,300 万年前の新生代第三紀中新世の火山岩。それが、日本海の波による侵食を受け地上に現れたものとされている。



柱状の断崖の東尋坊



土産物店



東尋坊タワー

■ あとがき

東尋坊を 15 時に出発。高知へ帰り着いたのは予定よりも 1 時間遅れの 11 時であった。

昨年の 11 月に和恵が結婚したが、幸いにも堀田朋男君が高知勤務であるため一緒に旅行をすることができた。来年も 5 人揃って旅行できることを念じている。